
時を止めるキスを。

沙璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時を止めるキスを。

【Nコード】

N2273W

【作者名】

沙璃

【あらすじ】

彼氏の浮気発覚によりいきなりフラれて、とりあえず仕事だ！と意気込むより早く。

「別の男で忘れるのもテだろ？」なんて、泣く私の前に。真夜中に現れたオトコ。それは天敵もとい上司で…？

HP記念小説を連載化。一話完結式。

オシナの期限？（前書き）

結婚の前は大抵、まず恋愛

それなら、身体だけってどうなの…？

オンナの期限？

いつかは結婚したいなあと、漠然と思っているんだけど。それが現実味を帯びるにはまだまだ先は長い…。

女としての自立はおろか、実家では既にパラサイトの扱ひを受けている。“そろそろ結婚は？”と言いだめたけど、正直言っただけなら予定は皆無だ。

同業種とのコンパで出会い、付き合っただけで1年半経った彼氏がいるけども、…何だか最近の様子がオカシイ。

夜の電話に出ないこともあれば、メールに至っては2日間放置されていることまでザラにある。決定的なものは、彼のアパートへ行った時に感じたフルーティな女物の香り。

いつの間にか機種変更していたらしい、スマートフォンを片時も離さない。そして電話が掛かって来ると窓を開け、ベランダとも言えない外へ出てしまう。

そして極めつけは、私に接する態度の変化　話し掛ければ相槌は打つけど、時おり面倒そうに溜め息を吐いていた。

当然ムツとしてそれを咎めたら、久々に会えたのにエッチもしないでベッドに1人不貞寝された。その彼が眠るベッドに潜り込むのも

癪だと、可愛げのない私はソファでブランケットを被って情眼を貪ったのだ。

ああ、なんて情けない　　27歳って結婚と仕事の狭間に揺れる年齢なのに。その選択権もなく捨てられるのはもう時間の問題かもな…。

「浅川あああ！」

「は、はい。何でしょうか」

そぐわない怒声が響き渡ったここは秘書室。その声の発信源の元へ向かうのは、私こと浅川あさかわあいな藍凧だ。

この先の展開が見え見えなだけに、行きたくもない、ああ最悪と思いつながら。足を進めた先で対峙する人物こそ、秘書課を管理する総務部の瀧野たきのりゅう龍である。

名前と性格がこれほど一致する人も、そうそういないと常々思う。…いや、身体がゴツイのではなく、どちらかといえば細身マツチヨに思う。顔立ちも柔和そうに見えるけども、どれもがこの性格をオブラートに包むための材料に過ぎないわ…。

自身への被害蔓延を避けるために辺りが静まり返る中、覚悟を決めて彼の元へ向かった。するとノン・フレームメガネの奥の瞳がこち

らへ向いたと同時に、ギロリと鋭い閃光まで見て取れる。

「坂井さんの買って来た手土産！指定したのは君と言う話だが？」

「…はい、そうですが」

「ばかやろっつ　　笹川常務の指示を仰いだクセに、一体何を聞いていた！？」

強烈な声音でハツと我に返った。常務の第2秘書を務めている私は、後輩の坂井さんに手土産には某高級店のゼリーを依頼した。

いや、それが間違いだ　　“果物アレルギーのある方だから十分気をつけてくれ”と言われていたのに…。

「たまたま常務が先方へ渡す前に気づいたが、…これがどれほど危険で失礼な行為に及んでいたか分かるか？」

「も、申し訳ございません…！」

真つ直ぐ冷たい瞳に射ぬかれたことで、ゾクリと身震いした。それを隠すように謝罪すれば、情けなさが自身を取り巻いて行く。

今や国民病とも言われるアレルギーだけど、アナフィラキシーを起こせば命にかかわるものだ。それを知っていながら先方へ渡した、となれば常務はおるか会社の質も問われかねない。　　秘書として私は、有るまじき失態を犯したのだ。

「…もういい　　今後は気をつけてくれ」

「申し訳ございませんでした…」

ふいと視線を逸らした瀧野チーフには、これ以上の弁明など不要という意味。ただし、それがさらなる重圧として跳ね返っていた…。

* * *

「あー、…最悪だ」

誰もいない秘書室でPCを前にしてそう呟けば、孤独と情けなさがまた押し寄せてくる。

あれから常務へお詫びを入れたところ、気にしないで良いと言って下さった。常務の優しい人柄にいつも救われているが、自分の至らなさに泣きそうだったのも本音。

そして今は、明日の午前中までに仕上げなければならない資料の作成に追われている。それはドイツ語のため、大学時代にドイツ留学していた私しか出来ない内容であった。

英語ならばヘルプ出来るのに、と不憫そうな顔をした後輩や先輩に対し、大失態の挽回だからと“大丈夫”と言いきった私。…それを後悔したのは、今なのだから残念すぎるな。

うーん、と両腕を伸ばしてストレッチをしたところ、デスク上に置いていた携帯電話が着信を告げた。その通話主の表示に思わず頬が緩んでしまう。

「もしもし、タカシ？」

この前のシコリが残っていたのも事実だけど、それを許せてしまうのだから現金なもの…。と、呑気に思っていたのはここまで

「はああ？別れたってどういこと!？」

「他に好きな子が出来たから、悪いけどもう無理。勝手にごめん」

「なっ…、」

その理由を問いただす間もなく、ツー・ツーと無機質な通話終了音へと切り替わっていた。

いや浮気してる気が…？なんて、のんびり構えている合間にも。しつかりタカシと相手の女に堀を埋められていたとは、情けなくて涙がポロポロ零れ落ちていく。

「う…、ひっ、く…っ」

浮気されていた挙句、“ムリ”の一言でアツサリ捨てられるとは…。彼と平穩に過ごして来た筈のこの1年半は、果たして何だったのか分からなくなる。

早く帰って少しでもベッドで眠りたい、とあんなに必死でタイピングしていたのに。ドイツ語が羅列した紙ですら、今日の私がついていないことを象徴する存在に見えてくる。

「ばかああー…」

この歳で新たな恋へのバイタリティはすっかり薄れているし、もうコンパへ行くのも面倒になって来ている。それはタカシの存在があつてこそだった。

バカと静かな部屋で呟いた言葉は、目の前のPCデスクの画面に跳ねて見事に自分へ返って来る。

浮気していると気づいていたのに、それを放置したのも自分。まして泣くことしか出来ず、彼を繋ぎ止める自信もゼロに等しい。それを生み出しているのも自分なのだ。ポロポロ零れ落ちる度、恋にも仕事にも取り組めない自分が嫌で仕方ない…。

「もう、やだ…」

「それなら、追いかけたらどうだ？」

「っ…」

シンと静まっていた中へプラスされた声音に、ビクリと大きく体が跳ねた。そっと涙を拭って恐る恐る振り返れば案の定、瀧野チーフその人を捉える。

「どうなんだ？」

「…良いです、仕事あるし」

「へえ仕事？泣き喚いていたのは誰だ？」

こちらへ歩み進めつつ鼻を鳴らすような嘲笑をされ、グツと言葉に詰まってしまう私。

その間にこちらとの距離を、僅か数メートルに縮めたチーフの眼差しに射ぬかれる。逃げようとするほど追いつめる姿は、まさに“ドラゴン”そのものだ。

「それとも、もう綺麗サツパリ清算か？」

「か、関係ないじゃないですか？」

そうだ、この嫌味が服を着ているようなムカツク男はただの上司ではない。

これ以上の詮索は不要と睨みを利かせ、再びPCに向き直り掛けた刹那。左手首をグツと掴まれ、それを簡単に制されてしまった。

狼狽したことも見透かしているのか、手首を捉えていた手は私の手の甲へと移動し、そっと重ねられてしまう…。

「忘れたって言うなら、コレは不要だろ？」

「ッ、離して下さい！」

チーフの指先が捕らえた物　それはまさに、今フラれたばかりの彼が、付き合いたての頃にペアだからと贈ってくれた指輪。

怒りにまかせて、ごみ箱にでも捨て去りたいのも山々だけど。…それが出来ないのは彼への気持ちはまだ葬れないから。　分かりきった答えは未練に握り潰され、もはや情けなさに打ちのめされるばかり。

「ひっ…、も、うは、なして…」

「嫌だね」

「はあ!？」

彼氏でもない男の手に虚しさが募り、ましてそれ上司となれば惨めなキモチが倍増する。いい加減1人にして欲しいというのに、まさかの拒否権行使にはコチラの方が仰天だ。

「泣くより仕事が先だ」

「…ええ、そーですね。所詮アラサー女の失恋なんて、社内に広まっても不憫にしか思われませんし」

そうだ、浮気されて失恋したと泣き喚けるような年齢でもない。む

しろ“これから大変だね”と、妙な心配をされかねないだろう。

「そうじゃない」

「・・・は？」

「セックス」

いやいや、ちょっと待とうか　職場になんて卑猥なフレーズを持ち込むんだこの上司は。あまりに仕事に没頭しすぎて、とうとう頭の中のネジでも外れたか？

「別の男に任せて抱かれるのもテだ」

普段の仕事ぶりからはおおよそ想像出来ない言葉をサラリと言いつける目の前の上司は、呆気に取られる私の唇に触れた。

すっかり口紅の取れたそこをなぞる手つきは、間違いなく慣れている。言葉を紡ぐのに躊躇いを見せれば、ニヤリと弧を描いて平常心を一蹴させてしまう。シンと静まり返る中で徐々に近づく彼の顔に、とても拒めない環境が出来あがっていたせいだ。

チュと軽く落とされたキスで、一気に体内の温度の上昇が分かっってしまう。スツと離れた時、鼻腔を掠めた男物の香りが鼓動をイヤに押し上げた。

「これも何かの縁　あとで楽しむかな」

「っ…」

口角を引き上げて小さく笑ったのは、紛れもなくただのムカつく嫌味な上司。　そう思いたいのには、隣のデスクで手伝い始めたチーフを、男として意識する自分に戸惑うばかりだ…。

決意と裏腹に？（前書き）

キスの次に入るのは、もちろん……でしょう？

決意と裏腹に？

穏やかな昼下がりのオフィス街にある、チェーン展開の有名カフェは今日も賑わいを見せているが、どうやら目の前の人物は今にもそれに揶揄を入れそつだ。

「はああ！？何なのタカシのやつ、…ふざけんな！

あの顔レベルで二股って何様のつもり！？藍凧以上の女なんか、そうそういる訳ないっつーのに！」

「うん、円佳^{まどか}…。とりあえず落ち着いて、ね？」

よく突き詰めていけば浮気を匂わせていた男に、先日の残業中一方的な電話でフラれたのはこの私だ。

そして遡ること約1分前 向かいの席に座る、同僚で受付嬢の円佳へ一昨日の一件について話したところ。

鉄板メニューの胚芽ブレッドのサンドウィッチとバナラ・ラテに手をつけるより早く、恐ろしく破顔させた彼女は普段の言葉遣いからも遠ざかっていた。

制服時代はギャル誌がバイブルだったという円佳は大学入学時にスタイル・チェンジしたため、今となっては綺麗なオネエさんにしか見えないのだ。

今日もフルアップして綺麗なうなじを見せたヘアスタイルは色っぽく、如何にもキャリア風情のスーツ・スタイルの彼女のイメージもこれでは崩れかねない。

「あーム力つく！今すぐ殴りこみに行きたいんだけど」

「いやいや！円佳がストレス抱えちゃダメだから」

“それなら同僚の男を使って”と、とんでもない策略を打ち出した彼女がスマホを取り出したため、慌ててそれも宥めるしかない。

「もー、何で藍^{あいな}風はそんな冷静なワケ!？」

「まあ、冷静ってどうか…、」

以前彼から香りのチョイスからして、間違いなく私より若い女だろう。というか、敵意むき出しで残り香をまとわせる辺りも今なら若さを感じる。それにグラビア好きなタカシのことだ、若さの点でノックアウトしたに違いない。…こうして推察する私より、はるかに可愛い子にね。

「うーん…、タカシの変化に気づいてたのに…私、それも放置しちゃったんだ。

心のどこかで本命は自分だから大丈夫って驕りがあったし…、いま思えばタカシに優しく出来てなかったんだ。

だからさ…時間の長さ^{かま}に感じて、大事なものと悩んでいた時とか気づいていなかったんだね。

これは憶測だけださ…。タカシの方も初めは、罪悪感を感じてた時があったと思うから、…サインを見逃して放置したのも悪いかなって、」

何より彼に別れを質す電話を掛け直せなかったのは、すでに望みの無い状況に割り入るのが面倒だった。…と言うのは、ただ体の良いオトナに感じるだろうけど。

本当のところは、負け試合を挑んでみつともない部分をさらけ出す勇気も気力もなかったのが本音。

だからこそ、いつからかタカシの仲は溝が出来て行ったのだと思う。

それでも私は、27歳という婚期を気にするお年頃であっても、フラれた痛手に浸るのだけは彼に負けるみたいで悔しい。

「だからね、これからはとりあえず仕事を頑張るよ。

最初はシヨックだったけど…泣くだけ泣いたし、今はホントに大丈夫だから。

オマケに円佳が心配して怒ってくれたから余計にスッキリしたよ、ありがとね?」

「…藍凧が納得してるなら良いけど、ムリしないでよ?」

改めて振り返ってみると、私はタカシと知り合ってから今まで、彼をひとすじに愛していたのは事実。

好きか嫌いか尋ねられれば、今はとてもどちらとも言えない。昨日まで確かに、1年半も付き合っていたのだから。

それこそ結婚しようと言われたら、間違いなくYESを告げていた
だろう。　　今となつては、虚しい空想になり下がったけどね…。

「まあ、暗い話はここまで！　　円佳の方こそ、例の年下くんとは
どう？」

「ずるいなあ…。藍凧も今度は年下がオススメ　　あ、この前のバ
ーテンくんとか良くない？」

「…絶対ナイって」

此処でガラリと話題を変えてしまったのも、その後伝えるべき“
事柄”があまりに突飛なモノすぎたせい。まして彼女が同僚である
がゆえ、時期尚早だと閉口を選んだのだろう。

* * *

のんびりとは程遠いものの、どこか清々しい気持ちで休憩を終えて
職場へ戻ると、さっそく電話が入って業務を再開した。

役員秘書は重役に合わせて動くものであり、本来ならばお昼の時間
帯に休憩が取れるのも珍しい。悶々とした感情を携えて出社した分、
それが解消された今はある意味で恵まれていたと思う。

大阪支社長から常務宛ての用件を受け賜わって受話器を置くと、続

けざまにスケジュール追加処理をした。

「藍風さんすみません、今よろしいですか？」

「はい？…あ、三浦^{みづら}くんどうぞ」

PC画面を注視していたところへ背後から届いたのは、秘書室における貴重なメンズの中で最も若い三浦くんの声だ。

「すみません、…帰りに時間ないですか？」

「どうしたの？」

「…実はちょっと相談が、」

甘い顔立ちで穏やかな性格の彼は、担当役員にも部署内でも可愛がられている存在のだが。どういう訳か、入社当時に指導役を任されていた私に最も懐いてくれている。

それも彼がさす、相談内容は今日も遠距離恋愛中の彼女のことだろう。…たとえ可愛げがなくても弟を持つ身としては、やっぱり頼られると嬉しいものだ。今の私がアドバイス出来ることはゼロだし、むしろ慰められる立場かもしれないけども。

「ん、大丈夫！それじゃあ18時に…、」

「浅川、ミーティング・ルームAへ来てくれ」

「…、」

“いつもの居酒屋で”を言い終える前に、私の席から数メートルはある地点から届いた声音に口を閉じざるを得ない。

恐る恐るそちらへ視線を向ければ、当然の如く視界に入ったのは

瀧野 龍たきのりゅうその人。

どういうことだ、このオトコ…。今日は午前中は会議に出席で、午後から社長に同行して名古屋支社へ向かうはずだったわよね？
昨日の夜にイヤというほど耳元で聞かされた声色がリフレインして、声にならない声が動揺をさらに駆り立ててゆく。

「聞こえたのか？」

「は、はい…っ」

「昨日作成した資料持参で来い」

「かしこまり、…ました」

秘書課を統括する総務部の男 すなわち秘書室内で彼に太刀打ち出来るのは、誰ひとりとしていない。

三浦くんにさっきの続きを話そうにも、ギロリと鋭い視線を向けられる中で言葉を紡げる猛者でない私。当然のように、“ごめんね”とリアクションのみで彼に目を向けると、苦笑しながらも首を振ってくれた。

小さく溜め息を吐いてドイツ語で完璧に仕上げた資料を手にし、ノン・フレームのメガネを掛けたドラゴンの待つミーティングルームへ向かうしかない。

ドアの前に立つと再度、気づかれぬように溜め息を吐き出し、ようやく手の甲でコンコンとノックした。

「チーフ、…浅川です」

「どうぞ」

「失礼しまつ、」

最後の一文字が言えなかったのは、許可に応じてドアを開けた先でいきなりその口を封じられたせい。

私の後頭部を片手で支えたまま、もう片方の手でガチャリ、と無機質な音を立てて内鍵まで掛けたのは、紛れもなく呼びだした張本人さらに持参したドイツ語変換済みのファイルは、パサツと情けない音とともに地上へと崩れ落ちていた。

「ちっ、ふっ、ちょっ」

チーフと呼ばうにも、角度を変えて唇を重ねられては到底ムリな話
いつしかドアへと背を寄せられていた私の膝を、グツと自らの膝で
割ってさらに密着されては、どうしようも無い。

「やっ、っ、ふうっっ」

「ここは会社なんですけど…！こんなコトする場所じゃないんで
すけど…！」

そんな道徳心を持っていても。差し込まれた熱い舌を、瑞々しい音
を立てつつ絡めてしまう自分のフシダラな部分が開かれてゆくのは
止められなくて。

いつの間にか後頭部を支えていた手が、スカートを上げつつ太股を
撫で回していてもとても抗えなくて。

この温度と強引さがズルズルと簡単に、真夜中の夢だと思いたい出
来ゴトを否定させてくれなくなった。

「…今日の夜は、俺の家にするか」

もちろん断ることも可能なのに 身体しか求められない関係を、
どうして私はリスクを冒してまで上司と築こうとしているのだろう
…。

不埒な心とは？（前書き）

抱き合えば、生まれるのはただの情
だから。

そう言い切るべき相手なの

不埒な心とは？

自分という人間の狭小さを知った、ものの10秒でフラれたお別れ事件。対して自分の不埒な部分に呆れたいのは、まさにこの状況ではないだろうか…。

すっかり覚醒した意識の中で感じたのは 私を引き寄せて離すまいとする腕の重み、そして全身を覆うような気だるいセックス後の余韻。

動かしすぎて腰にキているし、すでに疲労度合が半端でない。こんなところでも老化現象が現れるのか、と苦笑するしかない。

どれだけヤったんだ…、なんて思いながら。傍らで規則正しい寝息を立てる絶倫オトコをチラリ窺った。

私を横たえさせてから必ず取り払うノンフリューム・メガネは、今日もベッド脇のサイド・テーブルでインテリアの如く置かれている。鈍い間接照明がまだ外の世界の夜明けまでには、幾らか早いことを教えてくれた。

目が冴えてしまうと途端に、冷え性ゆえ外気に晒していた肩付近に寒気を覚えて、男が掛けてくれたらしいシーツをさらに両手でそっとなぞり寄せる。

ホテル特有のパリッと糊の効いた手触りは、どうしてもリネンに柔らかさを求める私は好きになれない。旅行だと寝つきが悪くなるのもこれが理由、なんだけど。…ただセックスをする場に、そんな文句をイチイチ立てる暇はないというもの。

シーツを引っ張った時に起きた？かと、再度視線を上方へと向けてみる。しかしながら、その美麗な顔は長い睫毛を伏せたまま、回されている腕の力も相も変わらずだ。

息を潜めているのも、こうして行動ひとつを気遣っているのもそのすべてが、この男のせいだけだ。

普段は綺麗に流してある黒髪も、さすがに“激しい運動後”では乱れまくり。プライベートの見えない謎深きドラゴンのことだ。この写真を携帯にでも一枚収めれば、社内の女子ファンに高く売れるに違いない。…いや、そんな未恐ろしい行為はメンドウだし絶対しないけど。

「それこそバカだし」

そんな物を世に出せば、私がこの男のプライベートを知っていると自ら公言するようなものだから。

フラれた現場を押さえられたことで始まった、ただ夜に待ち合わせで身体を重ね合う関係も早2週間が経過している。

と言っても、会社のホープなドラゴンは様々な面でお忙しいのだから

う。こうしてお呼び出しされたのは、今日を含めると4回目。仕事終わりを労う会話や食事もそこそこに、ただキスして抱き合っているの繰り返しであった。

そんな朝はいつもより1時間早くセットした携帯のアラーム頼りで起きると、既にシャワーを浴び終え昨日のスーツ姿に戻った男と対面する。

ノン・フレームのメガネを掛けて上司のオーラを纏った彼に対し、“お、はよう、ございます”と部下の顔に戻ってたどたどしい挨拶をするしかない。…この瞬間が、ドラゴンとの時間でもっとも嫌い。

ここでもし、“おはよ”と笑って返してくれるのなら、この関係に少なからず期待してしまうのに。

いや、それははない。断じてその考えは違うな。期待なんてすれば、まるで私がこの男を好きみたいじゃないか。

小さく頭を振ってそれを払拭すると、すっかり眠気とオサラバしてしまった瞳を固く閉じることにした。

“浮気する男は最もサイテーだ”と、つい最近まで罵っていた女を考えることじゃない。…いや、この関係を築き上げる自体、私もドラゴンに絆されてすっかりモラルが欠如している。

そう、すっかり自分のことに必死な私は、先にお尋ねするのも忘れていた。今も引き寄せて離さないこの傲慢な男には、れっきとした

彼女がいるという事実を…。

“俺の家にするか”と言われた2度目の夜　確かにこの男の家（
啞然とするほど、かなりの高級マンション）へ行つて、早々に誘わ
れた寝室でセックスをした。

だけどバス・ルームを借りた時に見た、女性物の基礎化粧品の数々
はどれもがレギュラー・サイズ。それで失礼ながら所々に目を配れ
ば、あの辛辣男とは無縁と思われる小物類を部屋のアチコチで発見
した。

間違いない、この男には本命がいる　そう決定的づけたモノは、
“今度帰るのは来週の月曜日だから、迎えよろしく。愛未”と書
かれたホワイト・ボードを玄関先で発見したため。そこで一足だけ
出されていた、レディース・ブランドのパンプスを見つけてさらに
納得した。

OLが大枚を叩くほどの高級靴を置けるのは、安心してている相手イ
コール彼氏しかいない。…今までの私だってそうだったのだから

「い、…かわ、」

「…んー、」

あたたかくて未だ起きかけの寝惚けた状況が、人間もつとも気持ち
いい時間だと思う。アラームがもう鳴ったのか、と感じながらもま

た睡眠を貪るのはさらに贅沢だ。

「浅川ああ！」

「はっ、はい！？」

それを見事にバツサリ断ち切って下さったのは、耳慣れた凄まじい騒音 もとい嫌味が服着たような男で、寝惚け眼をする間もなくパチツと瞳を開いた私。

「お、はよー…！ございます」

「まったく、やっと起きたな。

アラーム鳴っても全然起きねえから…いい加減マズいぞ」

今日も既にスーツ姿で髪だけ乾き晒しのチーフは、チラリとその鋭い眼差しを腕時計へ落として告げる。

声に釣られて飛び起きたものの、日常そのものの姿を前にしては気恥ずかしさが戻って来るのも事実で。一晩で少しは糊の取れたシーツをキュツと掴み、それを胸辺りまで覆ってしまふ。

「今さら隠す必要もねえだろ」

「…恥じらいを忘れたら女の終わりだ、って友だちに言われてるの
で」

「何だそれ」

行動もさることながら発言にも呆れたのか、彼のその声色でズキンと小さな胸の痛みを覚えた。　　まるで“ただのセフレだろ”と言いたげだから。

「あ、それより！私のことは良いんでチーフは早く行って下さい。朝イチで全体会議がありますよね？」

「ああ、それじゃあ行く」

「はい」

ひとつ頷いてこちらへ視線を向けたチーフの瞳は、やっぱり今日もタイガーの如く鋭さを備えていた。さして会話なく開閉したドアを見送ると、恥じらいも何もゼロで裸のままシャワー・ルームへ向かう。そして水滴の残る室内が、また今日も虚しさと後悔ばかりを募らせる。

三浦くんと話していて呼ばれた時　　その日はチーフが本気なのかと、ちよつと期待していた。だけどそれは、私の都合良すぎる勘違いだと数時間後に知った。

次の約束がなければ、甘い言葉も貰えないセフレ関係。それでもあのムカつく男が、私の中で大きなウエイトを占めている事実にはつけない。…認めたくないけど、初めて見た寝顔に愛しさを覚えたから。

肌を打ちつける水滴の中で薬指を見れば、元彼から貰った指輪を未だ外せずにいたのもこれが理由だったのか　ドラゴンが目に停めた獲物（指輪）がしなければ、もう誘われなくなるだろうから。

つまるところ、彼にとっての都合の良い女だと肯定してまで、この2週間抱かれるのを待っていただけ。

どうして私は愚かなことに、自分で自分の首を閉めるような行為をしているのだろうか？

タカシと同じ轍わだちを踏んでいるだけでなく、今度はあの男の彼女まで苦しめるだけなのに…。

戯れ言に覚悟？（前書き）

女の期限は誰が決める？
なっ
た？

そんな戯れ言、いつから考えるように

戯れ言に覚悟？

男に依存するのは好きじゃない。恋愛に執心するのだってメンドウ。友情より恋愛を優先させれば、女の付き合いが薄れるとも知っていた。

かと言って、アラサー世代に足を踏み入れてからは、さほど簡単にラフな恋愛が出来ない消極さも持ち合わせていて。

塵積もって捨てられない妙なプライドだとか、社会へ出てから備わっていた要らないモラルもまた然り。それらすべてが、結婚への道のりを着実に築いているのだと都合よく考えていた。

だからこそ、彼氏がいるから結婚は彼といつか出来る、と自らを全パイに据えていた私。当然、若い頃のような必死さがいつしか薄れていたのだ。

お互いを適度に必要とし合える相手に、なおかつやりたい事をしながら、互いが会いたくなつた時に会えるのがベスト。

愛情が重いほど、相手が辛くなるのも知っている。まして自分だって、束縛されるのも大嫌いだっただから。：そんな過去の経験を顧みるほど、年齢や立場のせいにして何も言えなくなつたのかもしれない。

「ねえ藍風、今日ランチ行かない？」

ある日、秘書室の先輩である、柚さんゆずから珍しくランチに誘われた。いま思えば、この一言がそもそも発端であった。と気づくのは随分あとの事になるけど、仲の良い先輩のためもちろん笑顔で了承した。

常務の第一秘書を務める、5歳上の先輩とお昼を共にするのはごく稀なことで、第二秘書の私はそう思えば自由な時間が多い。

そんな彼女の働きぶりからは、年齢とともに責務が増すのを窺い知ることが出来る。…もっと努力しなければと思う反面、このまま骨を埋める覚悟も未だ出来ていない。

「やっぱり混んでるねえ、どれにする？」

「うーん…、B定食にします。柚さんは？」

「しょうが焼きのA定食！」

安さの割に美味しいと評判の社員食堂へ向かったところ、ちょうどお昼時で混雑する中へとけ込んだ。どれにしようか思案したもの、結局ヘルシーな和定食のBをチョイスした私。

ガッツリお肉を食べたいところだけど、デスクワーク中心の業務ゆえカロリーを気にしてしまうのは悲しい性。そんな些細なコトに構わない柚さんは、部署内で抜群のプロポーションを誇っているけ

ども。

* * *

「単刀直入に聞くけど 付き合ってるよね？」

「…な、にが、です？」

奥まったスペースへ席を取った私たちは、向かい合ってランチを食べることにしたものの。目の前で出来立てを示す湯気と香りが立ち上る中、それに手をつけずに尋ねて来た柚さん。

「誰って…、今ここで名前出しても良いの？」

「よく意味が、」

「私の同期の独身 っつえば、認める？」

その言葉とともに変わった視線の矛先は、私の薬指に未だ納まっているリング とうに感情云々は失せていても、外せないでいるタカシからの贈り物。

「いつ…、気づきました？」

「んー、最近だけだね」

「そんなに分かり易かったですか？」

確かに同期でも仲の良い円佳には、はじめとしてすぐに報告したものの。口外しないでとお願いしたのもあって、今のところそのルートからタカシと別れた件は漏れていない。このリングを外せない理由がある以上は…。

「まあ…、この前アイツを見てる藍凧の顔がね？ちよつとだけ、昔の私と重なったんだよね。

ホントに一瞬だったし…、たまたま目撃したから分かったただけよ
アイツも口割らないし」

指輪が無くならない限り、誰の目だって誤魔化せると自負していたのに。人生経験の豊富な柚さんには、この短期間で見抜かれたのかと内心焦っていた。

曖昧に笑った彼女を前にして、仕事時まで感情を出していた事実には後悔するばかり。それでも指に填まっている偽物のリングは、そんな自身に芽生えて枯れない不埒な想いを否定したからない…。

「で、いつから？」

「…1ヶ月ですけど、違うんです」

「違ってます？」

竹を割ったように明朗な性格ゆえ、想像通りにズバリ核心を突いて来た。だからこそ、悲しんでなどいられないのだ。どうにか弱気な自分を振り切って笑うと、問題のリングを敢えて掲げて見せた。

「ねえねえ、どういう意味？」

「割り切ってますから」

“コレがその理由なんです”と付け加えると、やっぱり浮かない顔を見せる柚さん。それもそうだろう、…自分の同期と後輩が、部署内で“好ましくない関係にある”と知って笑える訳がない。

「大丈夫です。…もうすぐケジメつけますから」

「ケジメって…え？なんの？」

「…私、ただ優しさに縋って…、甘えて来たズルい女なんです。だから柚さん、きちんと話せるようになるまで…もう少し、待って貰えますか？」

この1ヶ月で問題の上司こと、ドラゴンと寝てしまったのは6回。本当は拒否すべきところを“今日が最後…”ズルズル絆されて来た。

まして心でダメだと思いつつも、今もなおタカシから貰ったリングを外さずにいるのは、ドラゴンに誘われたいという願望を持つ狡

猾な自分のせい。

さらにプライベートに立ち入れてしまっ、お互いのマンションじゃなくて。欲を満たすためのホテルなら良いかもしれぬ…、と次第に逃げ道まで作っているから。

今度誘われた時こそ、本当の意味での2つの恋からオサラバするための、タイム・リミットにしよう

* * *

「浅川 常務のスケジュールに、これも追加頼む」

「お疲れ様です。かしこまりました」

先ほどまで全体会議に常務と出席していた瀧野チーフが、疲れた顔ひとつ見せずに秘書室へ用件を伝えに現れた。

そのため立ち上がって資料を受け取れば、真っ黒な瞳と目が合ってしまい、思わず視線を逸らしていた私。

無機質なノン・フレームのメガネを掛けた、男の裏のホントの欲深さ それを感じさせない“今の顔”にすら、ドキリと高ぶっていた妄りな鼓動に蓋をするため。…早く離れなきゃと思うのに、聞き分けのない心に疲弊するばかりだ。

自分を叱咤してデスクへつき、深呼吸ののちPCで作業し始めたのも束の間　デスク上に待機させていた私用携帯が、短く規則的な振動音によってメール着信を告げる。

プライベートの携帯は仕事中にはほぼ使用しないものの、こちらへ連絡が来る方も僅かにあるため手放せない相棒と同じ。

スライド式の携帯を操作し、受信メールをチェックした刹那、動揺からビクリと肩を小さく揺らしていた。

【21時までそこに残れ】

たったこれだけの素っ気ない文章だとしても、送信相手の名前が苦しさを覚えさせるから　“もう終わりにしよう”と決意した日のお誘いは、チリチリと胸が焼けるように痛いけども。

“分かりました”と短く了承のレスをしてから、今まで薬指にワザと填めていたリングへ直ぐに手を掛けた。

戯れ言に覚悟？（後書き）

ご覧下さって、本当にありがとうございます。

不定期更新ですが、ゆるゆるお付き合い頂けたら幸いです。

過去と現在で？（前書き）

本能的に求めるオトコ とは、素直になつて言えない。

過去と現在で？

よくよく考えてみると。この歳になるまで私は一体いくつ、のめり込むほどに必死な恋を出来たのだろうか？

確かに年齢に見合うくらい、それなりに出会いがあつたし、年齢云々は関係なく好感の持てた男性とお付き合いをして来たが、それだけ学べたものがあるのも事実。

付き合つてから態度をコロリと変え、女友達との約束にも口出しするような束縛の激しい男にうんざりさせられた。その反動で甘えてくれるところが可愛い人と出会つたものの、次第にそれは情けない男にしか映らなくなつて別れを告げた。

そして今度こそは、両極へ転ばず波長が合う人がいいなと思案していた最中、気取つたところがなく、ほど良い愛想の男を見つけたのがコンパの席。

必要以上の干渉はしないし、互いのプライベートをほどほどに守りたい主義もまさに願つたり叶つたり。さらには身体の相性もほど良くて、互いの気質にピッタリな相手をようやく見つけられたとエツチ後に笑い合つたものだ。

自由と放置の言葉の意味を履き違えていた、と分かつたのはごく最

近のこと　　浮気された拳句の果てに、タカシにあっさり振られた現状である。

それと同時に、浮気された女の立場が如何に惨めなものであるのか知った。いつかの女子会で話していた時は、浮気を許す派に所属していた私。かつて女友だち数名が彼に浮気をされて、泣きじゃくる彼女たちを慰める機会も何度があった。

だからこそ、浮気とか不倫なんてフレーズが、どこかで自分とは無縁だと思っていたのかもしれない。

“ 相手が居て浮気するのがまずオカシイでしょ？もし彼氏に浮気された時は、潔く彼氏を振って相手の女へ差し出すよ　　こんな男に遊ばれて楽しい？ってね”

お酒を交えながらそう豪語していたのに、いざ自分が当事者になれば、元彼に存在意義を否定された気分陥って何も言えなかった。彼が最後に言った、“ごめん”の一言だつて無意味なもので。1年半の時を返して欲しいくらい怒りがこみ上げ、年齢ゆえのプライドがズタズタに傷つけられたのも事実。

それでもタカシにフラれて早1ヶ月　　今の私は着実に、タカシの浮気相手と同じ轍を歩み始めていたから。∴チーフに慰めて欲しくて填めていた、薬指のリングをゆっくり抜き取ったのだ。

「あれ藍風、まだ残るの？」

「あ、すみません。…どうしても終えたい件があつて」

メールに記載されていた約束の21時まで、あと15分ほどに迫つた頃。その午後から常務に同行していた柚さんが、少々お疲れモードで私ひとり仕事をする秘書室へ顔を覗かせた。

「分かつたわ、じゃあお先　頑張つてね」

「ありがとうございます…、お疲れさまでした」

直属の後輩の業務内容を知り得ているのだから、今日は残務がほほない筈と言いたげであつたが、含みのある発言に何かを察したのか、言葉少なく笑顔を見せて踵を返した柚さん。

それに秘書室の同僚は20時を過ぎると週中の忙しさも相俟つて、彼女と同様お疲れ気味で退社していたから、段々と静まりゆく室内はその後への緊張感をただ増すばかりであつた。

きつと最後の“頑張つてね”は、チーフとの一件に蹴りをつけることへのエールだろう。私の決意とは180度方向性が違つとしても、それが不安に包まれていた心をホツと落ち着けてくれた。

再び1人きりとなつた秘書室でチラリ腕時計を確認すれば、本来の目的時刻まであと10分強といったところ。こういうカウントダウンは妙に長く感じられるもので、目の前のPCをシャットダウンするとコーヒー・サーバーを求めて席を立つ。

今日は気分が別へトリップしていたし、実は退勤時刻早々にタイムレコーダーの認証は終わっている。急ぎでない業務を時間稼ぎに進めながら別の用件で居残ったし、これで残業代を頂く倫理観であるほど私もさほど若くないというものだ。

サーバーから熱々のエスプレッソが抽出され、それを冷ますようにひとつ息を吐き出してから、コクンと熱々の液体をゆっくり喉へ流した。ちなみに円佳は夜お茶が出来ないくらい、夜にカフェインを摂取すると眠れなくなる体質。そんなものと無縁な私はふと息が詰まったり疲れを感じると、チェーン展開で遅くまで営業するカフェへ自然に足が向いてしまう。

「あー…糖分欲しい、」

このサーバーのコーヒーの味は、やっぱりカフェと比較するのは失礼だけどそんなに美味しいものではない。出来ればコーヒーに浮かべるホイップ・クリームがあれば言うことなし、だと飲み進めながらいつも思っているけどね。

「コーヒーはブラックだろ」

「うわっ！」

誰も来るはずがないと油断しきっていた室内で、低音かつ鋭い声が背後で響いたお陰で私は、手にしていたカップを危うく落としかけてしまった。

「んだよ、その反応」

「だ、って、…びっくり、しますよ」

「もう時間だろ」

平常心だと自身に言い聞かせながら振り向けば、昼間よりもラフさを窺わせるチーフの瞳が真っ直ぐにこちらを見据えているから、鼓動は途端にドキドキと性急な動きを始めたものの。

「そうですね…、どういったご用件でしたか？」

「わざわざらしい」

「ええ、今日は“部下として”待っていましたので」

チツと舌打ちしたチーフが私の言葉に眉根も寄せたせいで、やっぱり今日だけ…と抱かれなくなってしまう。いつもの様に、このままチーフのお誘いをただ受けてしまいたいのも本当だけど。

「私、もう大丈夫ですよ…？」

「何が言いたい？」

勤務中の容赦ない叱咤とは比にならないほど、抑揚のない冷たい声音がなのおのここと心を締めつける。目の奥だつてツンと痛くて、頑張

らなければ涙を量産してしまいそう。

「…終わりに、して下さい」

上司と部下の関係に戻るには、ここが限界地点だし。チーフの彼女に気づかれる前に、早く彼を戻してあげなきゃダメ。…何より彼はどうやったって、私のことはセフレにししか見ていないもの。

「なんで?」

「やっと指輪も外せたし、…ほんと、チーフには感謝してます」

始まりがこの場所だったんだから、終わりを迎えるのもここの方が上手く精算できる。むしろ此処だから笑って、リングのない薬指を見せながらドラゴンに告げられているんだ。

そう、もう“時間”が来ているのだと。愚かな自分の感情が高ぶる前に、ぜんぶ振り切らなければならぬ…。

過去と現在で？（後書き）

マイペース不定期更新にお付き合い下さり、本当にありがとうございます。
います。

今後もゆるゆるご覧頂けましたら幸いです。

勇気を味方に？（前書き）

重ならない心　　そんなの、自ら断ち切るべきでしょっつ？

勇気を味方に？

人気がないオフィスが不気味と感じさせるほど、向かい合った男性とが言葉を継ぐまでの時間が途轍もなく長いものに感じられる。

「…では、それだけなので」

とても辛抱堪らず、口火を切ったのはこちらの方だった。少しばかり冷めた飲みかけのコーヒーは、ここでお役御免の私とリンクする。

だからこそ、紡ぎ出せた“終わり”のお誘いは私にすれば上出来なものだったと思う。彼から視線を逸らして向き直り、どうにか平静であろうと思いつながら、コーヒーを悠長に処分する余裕はなく、明日の朝それを片づけるつもりでシンクへ置いた。

「片づけるよ」

「明日しますよ。…気にしないで下さい」

背後から掛けられた声色が冷たく感じられると、含みを持たせて返してしまうのもやっぱり女としての最後の意地で。泣かないと決めて振り向けば、先ほど以上に縮まっていた距離が鼓動を押し上げた。

「ホントにそれが答え？」

「…はい、」

うそだ、うそだよ。問われてなお振り返れないでいるのも、目の奥がツンと感じられるのもすべて、この男のせいなのに。もし、なんて仮定をしたくなるくらい、…出来れば離れたくないのが本音だ。

先ほどまであんなに足が浮腫んで、週中の疲れと緊張に見舞われていたというのに。ドラゴンの顔を見た途端、疲れだけが吹っ飛んでしまい、代わってプラスされたのは彼への恋情ばかり。

近づくごとに、ふわりと漂う男らしい清涼感のある香りは、たった1ヶ月でスツと親しみを覚えてしまい。恐ろしい対象でしかなかった眼差しも、その奥の熱を知ってからというもの、プライベートはおろか勤務中も鼓動の高鳴りを告げるようになった。

そんな男のスーツの奥の体躯なんて知るはずなく、まして性の対象でもなかったというのに。今はもうシャツの向こうの *s i x p a c k* (割れた腹筋の意) に、たまらない情欲を駆り立てられる。

おこがましい言い方でも、こんなにも“欲しい”と強く思わせただけは、目の前のチーフが初めてだったのだから

「そ、れでは…」

今までの恋愛の終わり方って、どうしていたのだろう？ この場でとても応用の利かない過去を思い起こすとは、…まだ事なかれ主

義を貫こうとする自分をひどく嘲るしかないだろう。

「で？」

「…は？」

顔が上手く緩んだとはとうてい思えなかったが、どうにか笑みをムリヤリ浮かべた刹那。鋭い眼差しとともに顎先に骨ばった指が触れる。

必然と視線が向かった先は漆黒の瞳で、。ビクリと肩が揺れていたものの、それ以上に心は何かに囚われた感覚に陥る。まるで1ヶ月前の、アノ始まりのようなデジャヴが襲った。

「気づいてたか？」

「なに、に」

近づかない、そして近づけない距離感の中で触れられるのも辛いものがある。暫くして形の良い唇が紡いだのは、答えるには足りない問い掛けで緊張の度合いがさらに増す。

「嘘を言う時、いつも瞬きの回数が増える」

「はあ？」

シリアスな眼差しを向けられると、すっかりこの男の一挙手一投足に囚われるようにもなった。だが、それをアツサリ断ち切られては、

間抜けな声が漏れるのも致し方ないと思う。

「そもそも、終わる前に“何も”始まってない」

「そ、んな…」

「違うのか？」

「っ、」

無機質な瞳で発せられた否定の言葉に、言いようのない恥ずかしさと虚しさが一度に襲って来た。その中でボロリと瞳から生理的に零れ落ちた涙は、今すぐ“ヒドイ男”だと口に出出来ないがゆえ。

こんなこと初めから分かっていたのに、想像以上に現実は厳しいもの。むしろ、これが正しいのにどこまでも愚鈍な自分。思わず顎を捉えていた彼の手を、パシリと強く振り払ってしまった。

それなのに痛みを感じないアイアイ・マンなのだろうか？まったく表情を変えないとは腹が立つ。何だかここで泣いているのも情けなくなり、ゴシゴシと手荒く瞳と頬を拭ってから、彼が上司であることも忘れてキツと睨みつけた私。

「かえり、ます…！」

「帰るってどっくに？」

「家ですよ…！」

フツと鼻で笑われたことがさらに苛立ちを増し、今まで身体を許してズルズル関係を続けてしまった自分が恥ずかしい。かといって、それを洗い浚い口にして詰るのも絶対にしたくない。そんなことをすれば、この立場が危ぶまれるのも知っている。

何かを語る前に、別れを告げた理由を忘れてならない。私こそが、この男の本命を傷つける行為をしていた悪い女なのだから

「まあ…いい加減、帰るとするか」

「勝手に帰って下さい！」

「何言ってるの？」

その言葉を華麗にスルーし、さつさと自分のデスクへ戻って帰宅のために整理し始めた。…泣かない、絶対に二度と仕事外で口を聞かない。もう顔を合わせるのも嫌だ、この男が好きだったなんて無かったことにしたい。あ、いつそのこと部署異動希望を出そうか？よし、柚さんには申し訳ないけど明日にでも早速…。

コツン、と後頭部をノックされて振り返れば、ご機嫌ナナメらしいチーフが眉根を寄せて見据えているではないか。明らかに怒っていると分かるものの、…こちらだって怒り狂いたいことを忘れないで欲しい。

「な、んですか」

「で、“また”言いたいことも言わずに逃げんのか？」

「どっぴいっ？」

「今まで俺は、務めて言っていたつもりだ　返さなかったのはオマエ」

腕を組んでそう口にしたチーフの態度は、まさにふてぶてしいものだ。そんなことに構えないほど、発言には威力があつて、怒りはおろか反論の言葉も生まれて来ない。　悔しくてもこれが、惚れた弱みなのだろう。

「大事なのは時間より、素直な気持ちじゃねえの？」

「…どっぴいっ、」

「　鈍いのも大概にしる」

“え？”と尋ねるより早く、引き寄せられた腕はやっぱり拒めなくて。何より彼の行動を吐かれずに居る私はじたばたすることもせず、ただその腕の中で収まってしまった。

「彼氏に未練タラタラなのは誰だっつの」

「…そつちこそ、彼女いるクセに！」

「はあ？3ヶ月前に別れてるけど」

明らかにこちらに責任をなすりつける声色にプツン、と頭の中で何か切れる音がした。今さらじたばた暴れて言い返したが、ギュッと腕の力を強められるばかりで効果は薄い。

「…は？うそ吐き！

だ、だって…、チーフの家つ、靴とか化粧品とかつ、」

「チツ、それが…。」

あー…、神戸の実家住まいしてる妹が、モデル仕事理由で月イチ泊りに来てんの　まあ遅くに出来た子だしな…、親父がかなり過保護なんだよ。

仕事の間もホテル暮らしするより、俺が送り迎えすれば安心だとか言ってさせられてんだよ。…コツチとしてもあのマンション、親父の所有物件ってこともあって無碍には出来ねえの。

そうなると毎回、実家から色々持参するよりはマンションに置いてた方が楽だろ？」

「し、知りませんよ！

ていうか…私つ、…誤解するに決まって、」

舌打ちされた拳句、なんとも都合の良いすぎる言葉を並べ立てられてそれを今すぐ信じろという方がオカシな話だと思う。

だったら、女性の影を思いきり匂わせるマンションで先にアナタが説明しろ、とは頭が錯乱して言えなかったが。

「聞けばいいだろ？気にするくらいなら」

「ウソ！そ、ん…っ」

“そんな簡単に言わないでよ”と口にする前に、チュツとリップ音を立てて口づけが降って来た。お怒りを含んでいるのか、噛みつくように唇を啄ばむ彼はさすがのドラゴン。

「っ、ちょ…は、んっ」

PCもシャットダウンしてしまった今、ほぼ無音に近い状況で響く水音が妖しさを用意に連れて来る。こんなにも早く熱を身体の奥から押し上げ、芯から蕩けてさせてしまえるのはもう、この男以外にイナイだろう。

「ンツ、…あ、んん…っ」

スーツにしがみ付いていた手はいつしか彼の首へと回して、絡み合う舌先さえ“もっと深くして欲しい”とねだってしまい、…奥底へ沈めようとしていたオンナを易く引きずり出されてしまうのだから。

「これでも未だ、ウソだって言うのか？」

「…んん、…分かった、からっ」

「そっ？」

「ひゃっ、」

なんなのこの男と思うのに、そうと口に出来ない。それどころか、首筋をツーとなぞりながら耳元で囁かれると何も言えなくなる。…これもまた、1ヶ月の間に知らされた私の弱き箇所のひとつ。

どんなに肩意地を張って、目の前の男に噛みついてみても、このキスひとつがピタリと時を止めてしまいが如く

「あひ見ての 後の心に くらぶれば 昔はものを 思はざりけり」

「…何ですか、それ」

あれから警備員さんに見送られてオフィスをあとにした私と、チーフもとい、ドラゴン…じゃなくて龍は22時過ぎに2人で最寄り駅から電車に乗っていた。

「調べれば？」

「もう覚えてませんよ!」

ガタン、ガタンと都会の街並みを眺めながら走る電車内は混雑しており、自分のアパートの最寄り駅とは正反対の駅を目指す現状が、何だか流されながらその地へ目指している気がしてならない。

そう思わせるのもすべて、この男の態度のせいではないだろうか？

「だからボケてんだよ」

「そう言うチーフこそ。だからいつも、意地悪いって言われるんです」

「何だと?」

「本当のことですし」

もう上司だとか、何だとかお構いなしだ。フンと開き直って言い切った私に、やはりドラゴンの名らしく、鋭い眼差しの奥で雷光がお目見えしたがもう気にしたものは。

「藍凧」

「…え」

「隙あり」

初めて呼ばれた名前に驚き、ぼかんとしていたのも束の間。チュツと素早く落とされたキスはひどく甘くて、電車内という恥ずかしさなどとうに勝っていたのが事実。

「これでやっと、俺らの始まりだ」

その嬉しさ余ってなのか、俯き加減でもキュツと彼の手を離れたくないと握っていた…。ガタン、ガタンと規則的な揺れを理由に、彼の胸へと寄り掛かるくらい素直になろうと思えたから。

この瞬間さえ時が止まるほど、…つよくつよく抱きしめて欲しい
きつと言葉だけでは伝わらない気持ちだが、貴方からのキスで信じ
られるはず。
そしてありったけの想いを、今日からはベッドの中で素直に言わせ
て貰いたい。

「どうして、今日だったんですか？」

「うるさい同僚が発端」

「…それって、柚さん？」

「しかいねえ」

出会はどこに転がっているのか分からないって本当だと思う。

運命の出会いもひょんな発展にしてもすべて、ほんの少しの勇気
は女子の必須アイテムみたいね？

【時を止めるキスを。 終】

勇気を味方に？（後書き）

【あひ見ての 後の心に くらぶれば 昔はものを 思はざりけり
権中納言敦忠（百人一首より）】

意味：会ってちぎりを結んだのちの、はげしく苦しい恋心にくらべ
れば、その前は、もの思いをしなかったも同然だったのだなあ。

あとがき。

初めましての方も、いつもご覧下さいますお優しい方々も。

こんにちは、沙璃でございます。

この度は「夜を止めるキスを。」をご覧頂きまして、本当にありがとうございます。

元々はHPの記念小説SSへ反応頂いたことにより、改めて綴ったストーリーです。

私にしてはハイペースで新作のお話が完結いたしました。これも入院中の下書きゆえですね。苦笑

毎度ながら綻びも拙さも目立つストーリーながら、とても楽しんで綴りきることが出来ました。

これもひとえに、温かいメッセージやこちらへポイントをお入れ下さった皆さまのお陰です。感涙

またいつか機会（というか時間。苦笑）があれば続きを綴るかもしれませんが、ひとまず完結とさせて頂きます。

いつもながら言葉足らずなお礼ではございますが、本当にありがとうございました。

沙璃 (さじり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2273w/>

時を止めるキスを。

2011年10月3日02時35分発行